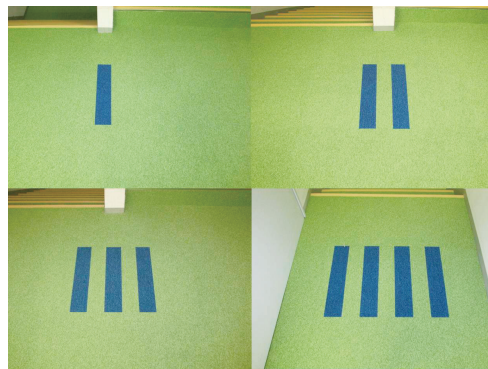


図書館だより

目次

図書館と学習支援	—平舘 英子	1
特集・学術交流企画「大学図書館の Vision」		
「大学図書館の Vision—『自学自動』と学修支援」		
報告	—大谷 康晴	2
学術情報基盤と学習支援：大学図書館の新しい機能をめぐって	—竹内 比呂也	3
日本文学・日本語学研究における資料利用と図書館	—山西（増井） 史子	4
服飾研究における情報利用行動と図書館	—佐々井 啓	5
日本女子大学叢書の紹介		
馬場哲雄著『近代女子高等教育機関における体育・スポーツの原風景』	—猪狩 眞弓	7
図書館からのお知らせ	—	8



西生田図書館階段各階サイン

図書館と学習支援

平舘 英子

森鷗外は、随筆「妄想」（明治44年3月14日）の中で、20代を振り返り、ベルリン留学から帰国した際に残念だったこととして、生きた師匠だけでなく、「相談相手になる書物も、遠く足を運ばずに大学の図書館に行けば大抵間に合ふ」便利さから離れることを挙げている。図書館は蔵書を有し、閲覧および貸し出し利用に供する営造物であるが、知りたい知識や情報を手早く探し出し、取り出す工夫のある営みが求められる空間でもあることをよく示す文章であろう。

明治以降百年余、大学図書館は大きな改革を迫られている。大学図書館が、他の図書館と異なるのは、学生たちの学習（学修を含む）への支援が重視されなければならない点である。近年、多くの大学図書館が、学生達への学修支援に基づく改革を進めている。2008年度中教審の答申「学士課程教育の構築に向けて」に始まる学士課程教育の質的転換への要請は、2009年度の学術分科会の「大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について」の審議と呼応するように、図書館におけるIT環境の整備と共に、学生たちに主体的・能動的な学修への切り替えを促し、その学修空間の中心に図書館を位置づけた。国立大学を中心に、図書館は紙媒体としての蔵書はもとより、IT技術による情報検索機能を有し、電子媒体を使いこなす学術情報基盤へと変革した。蔵書と閲覧・貸し出しという機能に加えて、教育・研究への配慮が強まり、多様な機材と図書館員を始め学修支援を担う人材を揃えたラーニング・コモンズの設置が急がれている。ラーニング・コモンズは、自由な討議を含む、学生主体の学修を促し、学生にワン・ストップ・サービスを提供する空間である。

本学図書館も、情報検索講座を開くなど地道な積み重ねを続けているが、学修空間を整え、全学的な支援のもとでの改革が不可欠である。半世紀前、上代タノ学長は図書館の意義を重視していた創立者成瀬仁蔵の意思を汲み、図書館を大学の心臓と位置づけて、当時としては最先端の現図書館を設立された。設立の記念誌は「本学の伝統的な教育理念である『自主性と創造性』を学問研究に、また人間形成に徹底するためには」として、「指定書制の確立や、学生相互間の自由討議、殊に学生が自らテーマを持って自主的な独立の研究をする機会が与えられなければならぬことを思い、その機能を果す近代的図書館」への思いを記している。IT技術の普及は、学習空間を大きく変化させてきてはいるが、上代学長の理念と先見性とは、現在の改革の流れにも沿っている。それらを継承し、発展させる道筋の上に、本学図書館にふさわしい新しい学習空間の構築が期待される。

（図書館長・日本文学科教授）

特集・学術交流企画「大学図書館の Vision — 『自学自動』と学修支援」報告

2015年5月9日に新泉山館1階大会議室で「大学図書館の Vision — 『自学自動』と学修支援」が開催された。文学部日文学科、文学研究科日文学専攻、そして図書館の共催による学術交流企画として企画され、高野晴代日文学科長の司会で進行した。

佐藤和人学長による開会挨拶、大谷康晴日文学科准教授による企画趣旨および背景知識説明の後、竹内比呂也千葉大学副学長、アカデミック・リンク・センター長による基調講演「学術情報基盤と学習支援：大学図書館の新しい機能をめぐって」が行われた。千葉大学アカデミック・リンク・センターは、「大学における学習の質の向上の方策が議論されている中で、千葉大学はそれらの議論から一歩先んじる形で、コンテンツを活用する新しい学習環境の構築を提案」（グッドデザイン賞選評）したものと高く評価されている大学図書館・ラーニングコモンズである。竹内氏は、大学図書館に関する研究の第一人者にして優れた図書館経営の実践者でもあり、多くの示唆に富む基調講演であった。

次に各研究領域における研究・教育のための学術情報利用について2件の報告が行われた。1件目は典型的な人文学の領域の一つである日文学・日本語学を対象として、この領域における情報利用の研究をしている山西（増井）史子中京大学非常勤講師による「日文学・日本語学研究における資料利用と図書館」である。2件目は、総合科学である家政学研究の領域の一つである服飾研究における情報利用について、研究者の立場から説明した佐々井啓啓服学科元教授による「服飾研究における情報利用行動と図書館」である。

休憩を挟んだ後、3名によるディスカッションが行われた。まず3人の講師それぞれに対する個別の質疑の後、共通する質問にご回答いただいた。講師全員が、図書館の学習支援とは大学の正課プログラムに対する学修支援に留まるものではなく広い意味での学習支援であるという意見をお持ちであった。さらに、どこまで支援していくのかについて自己規制はなるべくせずリソースがある限りやれるところまで行う（竹内氏）、気軽に尋ねるところを用意しておくのが重要ではないか（山西氏）、広い意味での学習支援ができることで研究のための学習支援が可能になる（佐々井氏）といったコメントも寄せられている。これからの大学図書館と学習支援のあり方については、全ての大学に共通する学習支援の正解はなく各大学が個別の事情を踏まえて少し先まで見越して何をやるのかを真剣に考えていくしかない、そして図書館だけの問題ではなく全学の問題としていくべきである（竹内氏）、建物にまず入りたくなる工夫が必要（山西氏）、図書館をアピールして素晴らしいと思わせる努力が必要（佐々井氏）といった意見が寄せられた。そして最後に平館英子図書館長、日文学科教授より閉会挨拶となりイベントは好評のうちに終了した。この特集では、講師のみなきまによる要旨を掲載する。

大学図書館は情報通信技術の影響をもっとも受けている図書館であり、大きく変貌している。本学では Vision120 にもとづく目白キャンパスの再開発が進められていて、開館から50年を経過した



図書館をどのようにリニューアルするのかが重要な課題となっている。近年は、首都圏私立大学に限っていても明治大学和泉図書館、立教大学池袋図書館といった優れた図書館が開館し、一般紙にも紹介されている。

大学図書館は、人文社会科学系の学生にとって数少ない目に見える教育・研究施設であり、優れた大学図書館を学生に提供することは、大学間競争の一つの要因となっている。さまざまな制約は当然あるが、その中でいかに優れた図書館を用意していくのかが本学にとって生き残りに直結する重要な問題であり、この企画が本学における図書館のあり方を真摯に考える契機になることを期待したい。

(肩書は全て開催日のものである。文責：大谷康晴（日本文学科）

学術情報基盤と学習支援：大学図書館の新しい機能をめぐって

竹内 比呂也

2008年12月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」以降、アクティブ・ラーニングの推進や単位の実質化のための具体的方策が活発に議論されるようになり、大学図書館へも関心が向けられるようになった。中央教育審議会答申（2012年8月28日）などでも大学図書館機能の強化の必要性について言及されるなど、学習の質を高める上で図書館のもつ役割が明確になってきた。このような動きがあるなかで、千葉大学では2011年度から「アカデミック・リンク」に取り組んできた。この概念の下、図書館機能をベースとした新しい学習環境を構築し、学生のアクティブ・ラーニングを推進している。

アカデミック・リンクは「学習とコンテンツの近接による能動的学習の促進」を当面実現すべき目標としており、自由に学習を行うことができる快適な空間、そこで利用するコンテンツ、そしてそこでの学びを支える人的サポートが有機的に結合し、なおかつそれらを自在に手に入れることができる場所であり機能である。

1) 空間

アカデミック・リンクの空間としての特徴は、様々な学習スタイルに対応できる空間の多様性にある。協同学習のみならず個人での学習にも配慮している。また、学生にとって知的刺激溢れる空間であるために、しきりのない空間を整備し、この空間で学ぶ学生が相互の姿を「見る」「見られる」環境とした。

アカデミック・リンクの象徴的な場所であるプレゼンテーションスペースがある。これはエントランス脇の学生が自由に出入りできる空間で、学生が学習の成果を公表できる場として機能することを期待して設置したものである。現在この場所で「1210あかりんアワー」と名付けられたセミナーシリーズを展開している。昼休みの30分という比較的短い時間に「教員が研究の楽しさを語る」を軸に、レポート作成、海外経験など多様なテーマを設定し、教員のみならず職員、学生、OBが講師として登壇している。

2) コンテンツ

アカデミック・リンクの特徴の一つはコンテンツを十分に活用した学習を実現しようとしている点である。この活動の一つの核は「授業資料ナビゲータ」と呼んでいる、特定の授業の受講者向けに、学習を深め事前事後学習に役立つ図書やweb上のサイトを紹介するパスファインダーの作成・提供である。また、教科書を指定するだけでなく、多くの教材が教育において使われていること、またe-learning環境が整備されてlearning management system (LMS) を介した教材の電子的提供が一般化する中で、教材としての講義動画の中やあるいは一般的な教材において、著作物の一部を円滑に利用できる環境を創出することが必要となっている。また、さまざまな著作物のある一章

や雑誌論文によって構成される「コースパック」の電子的利用といった、従来の流通単位とは異なるパッケージ化と授業での利用についても簡便な手続きでこれを実現できることが強く望まれる。これらの実現のためには、これまでの電子媒体と紙、あるいは図書と雑誌論文といった、対象コンテンツごとにバラバラであった検索環境を統合し、「何があるか+どのように入手できるのか」という情報を一括して利用者に提供できるようなインターフェースを提供することと、著作物を教育や学習に資するコンテンツとして利用する際の煩雑な権利処理を回避できる環境が必要である。これらの活動を推進するとともに新しいタイプの教材を開発するために、2013年から民間企業との共同研究を実施している。また2014年には大学学習資源コンソーシアムを設立し、教育学習における著作物利用環境整備のための具体的な活動を行っている。

3) 人的支援

図書館は伝統的にレファレンスという図書館員による人的支援をサービスの中核に考えてきた。しかし大学において学習を支援する可能性のある人的資源は図書館員だけではない。教員はいうにおよばず、学生自身も支援者となりうる。アカデミック・リンクでは ALSA (Academic Link Student Assistant) と呼ばれる学生アシスタントを雇用し、大学院生による学部生向け学習支援を実施してきた。このような学習支援についても開放的な空間で実施しており、学生が議論している空間の一角がそのための場所となっている。レポート執筆セミナーなども、教員、職員、ALSA が協力する形で実施されている。このような新しい取り組みも徐々に学生に受け入れられ、年々多くの学生が利用、参加するようになってきている。

2012年3月16日に増築部分を含む新しい図書館がオープンし、アカデミック・リンクの概念の下、新たな学習空間の提供を開始した。また2014年10月には、静寂空間として位置づけられていた建物の機能改善改修も終了した。学生たちは活き活きとこれらの施設やコンテンツを使っている。人的サポートも、ALSA による学習支援を中心に定着しており、学習支援として上記の3要素の有機的結合は十分に確立したモデルと言える。学生の学習時間が延びる傾向、アカデミック・リンクの滞在時間が長くなる傾向が見られ、アカデミック・リンクが学習の質を高めるという点で機能していることを示唆している。アカデミック・リンクは、図書館が持つ価値を今日の大学を取り巻く環境の中で再評価、あるいは新たに創造する契機となったと言えるだろう。

次のステップは、学習を支援するばかりでなく、教員に対して教育を行う上での支援を具体化させていくことである。これまでも新しい教材の作成などを行ってきたが、さらにより多くの資源を投入することが求められている。その具体化は図書館の範疇を超えたものになるであろうが、それは今日の大学に求められているものであって、大学全体として考慮する必要があるものである。

(千葉大学副学長、附属図書館長、アカデミック・リンク・センター長、文学部教授)

日本文学・日本語学研究における資料利用と図書館

山西 (増井) 史子

日本文学研究と日本語学研究は研究分野としては別であっても、必要とする資料は共通しており、資料を提供する図書館の観点からは同一と見なすことが可能である。

日本文学と日本語学研究に必要な資料は、内容的に2種類あり、研究対象とする作品の本文類と、研究成果である研究論文に大別される。

研究論文を論文単位で検索するためには「国文学研究資料館」が提供している「国文学論文目録データベース」と「国立国語研究所」が提供している「日本語研究・日本語教育文献データベース」があり、図書として出版された論文も含めて検索のデータベースは整っていると言える。しかし、近年発行された紀要に掲載された論文を除けば、論文そのものが全文電子化されている割合は高い

とは言いにくい状況にある。

一方、論文に引用されている文献を分析すると、研究者が必要とする論文の範囲は広く、50年以上前に出版された論文も必要としていることが分かる。それ故、実用的なデータベースにするには過去50年分以上の論文の全文が提供可能であることが理想だが、実現の目処は立っていない。

研究対象となる作品類は古典の場合、写本や刊本からの翻刻、さらには注釈の違いにより、同一作品であっても複数の出版物が存在している。古典の本文のみであれば、著作権の観点からは電子化が可能である。しかし、翻刻や注釈には著作権があるため、著作権の処理が必要となる。

また、明治時代以降に発表された文学作品の場合でも、同一作品において新聞や雑誌への連載時、単行本出版時、と複数の出版物が存在する。出版の機会毎に著者自身が本文を大幅に改訂する場合もあり、同一作品であっても、複数の本文の存在はめずらしくない。明治時代以降の出版物はその多くは著作権の存続を確認しなければならず、電子化されている本文は「青空文庫」などわずかである。

現在、「国立国会図書館デジタルコレクション」や「国文学研究資料館」の「歴史的典籍に関する大型プロジェクト」として著作権の処理が済んでいる資料や著作権が完全に切れている資料については電子化の計画も具体化している。

しかし、研究論文を中心に著作権者やその継承者を探すのが難しい孤児作品は著作権の処理が困難であり電子化の目処は立っていない。また、紙媒体の販売により成立している出版物に電子化を求めるのであれば、出版社の利益が確保できる保証が無ければ難しい。

以上の様な理由で、日本文学・日本語学研究に必要な資料は電子化が進んでおらず、今後もその傾向に劇的な変化は期待出来ないため、図書館が現時点で電子化が確認されていない資料を確実に保管・提供する役割を担っていく必要があると考える。

(中京大学・金城学院大学・愛知大学非常勤講師)

服飾研究における情報利用行動と図書館

佐々井 啓

服飾史研究では遺品が重要であることはいうまでもないが、それだけではどのように着装されていたのかを明らかにできない。従って、画像、文献資料、技術関連資料などを用いて総合的に研究する必要がある。

いくつか例をあげれば、江戸時代の小袖の遺品研究では、実際の製作技術、素材の検証、製作年代の確定、染料や文様の検討によって当時の風俗や文学が小袖意匠の背景となっていることが明らかとなる。

次に1880年代にフランスで日本の小袖から製作されたドレスは、その由来と着装の実態を調べていくと、たとえば、ルノワールのエリオ夫人の肖像画に、赤いドレスの上にゆったりと着物を羽織り、ウェストには赤いベルトを締めている姿がある。1885年のモーパッサンの『ペラミ』に、「日本風の化粧着を着て」と描写されており、当時、着物をガウンとして用いることが上流の夫人たちには流行していたことが推察できる。

さらに新聞・雑誌記事の例では、ブルーマー夫人が始めた雑誌『リリー』の1851年の記事に「フリーダム・スーツ」という名前の「トルコ風トラウザーズ」が掲載されている。この挿絵はイラストレイテッド・ロンドン・ニュース9月27日号に転載された。しかしすぐにこのスタイルは『パンチ』誌で風刺の対象となり、多くの挿絵や文章が掲載された。

そして19世紀後半にイギリスで一般的になった5時のお茶からティー・ガウンが登場した。この背景には、紅茶の販売価格の低下やお茶の習慣などの社会的な状況があり、その上リパティ商会の日本風のシルクの販売や唯美主義的なゆったりとしたドレスの影響があったと考えられる。

またこの時期には女性の権利を主張する運動が起り、「新しい女」たちの特徴的なスタイルと

して、スポーツ服に取り入れられていたテラーメイド・コスチュームが用いられた。

以上のように服飾研究は、様々な資料を用いて実際にある時代の服飾がどのように着装されていたのかを明らかにするものであり、経済状況、階級の文化、女性の立場、繊維産業や服飾業界の動向などを含めた総合的な研究が必要となるため、図書館での資料の検索が欠かせないものである。

成瀬仁蔵は学生への講義のなかで、「あなたがたは本箱になってはいけない」と述べている。これは、知識を蓄えることだけに集中することのないように、ということであろう。図書館も単に必要な知識を求める研究の場ではなく、知識を総合し、自らの生き方を学ぶ場として大きな意味を持っているといえるのではないだろうか。

(家政学部被服学科元教授)



*左. 佐藤和人学長による開会挨拶 右. 平館英子図書館長による閉会挨拶



*ディスカッションの様様。右から順に、佐々井啓氏、山西（増井）史子氏、竹内比呂也氏、大谷康晴准教授

馬場哲雄著

『近代女子高等教育機関における体育・スポーツの原風景 —成瀬仁蔵の思想と日本女子大学校に原型をもとめて』（日本女子大学叢書15）

猪狩 眞弓

著者である馬場哲雄先生は、生涯の研究の集大成である本書の刊行を待つことなく2013年5月21日に急逝された。一般教養課程保健体育の教育者として日本女子大学に就任された直後から本テーマを中心とした研究に取り組み、これまでに共著、単著として沢山の論文を発表してこられた。本書の日本女子大学叢書としての出版決定を、生前ことのほか喜ばれていたと聞く。筆者は日本女子大学総合研究所の多大なご支援により、先生が残していかれた原稿を院生同期のOG達と共に手探りで校正再編集のお手伝いをさせていただいた。

昨今の女子スポーツ選手の活躍は、かつて男子の領域であったソフトボール、サッカー、柔道、レスリングなどにまでおよび、覇気においても結果においても男子をしのぐかのようなものである。しかし、創立者成瀬仁蔵が本学開学に奔走していた時代は、高等教育に対する見方と同様に女子の体育教育に対する社会の意識は否定的なものだった。女子の体育・スポーツの発展の「原風景」を成瀬の思想と日本女子大学校にもとめ、現代スポーツの発展のみならず、女性の社会的地位向上にいかん貢献してきたかを紐解くものとなっている。著者が継続して投稿してこられた『日本女子大学紀要』論文の総括であり、それらの参考とされた文献は日本女子大学図書館が所蔵する『成瀬仁蔵著作集』をはじめ『麻生正蔵著作集』、『家庭週報』（日本女子大同窓会である桜楓会の機関紙）、『學報』などの貴重な資料と、女子体育教育に関連する洋書等である。

本書の構成はⅢ章からなる。第Ⅰ章では「成瀬仁蔵の体育・スポーツ観の萌芽」として、成瀬が本校創立前に渡米した折の見聞から当時のアメリカにおける女子体育・スポーツの状況が描かれる。第Ⅱ章では「成瀬仁蔵の体育・スポーツ観の確立」として、成瀬の帰国後に書かれた『女子教育』から、いかに体育・スポーツが女子教育に重要であるかが考察される。また、二代目校長である麻生正蔵が成瀬に影響を与えた可能性を探り、二人の協力による新体育理念を明らかにする。第Ⅲ章では「成瀬仁蔵の体育・スポーツ観の展開」として、日本女子大学において、どのような方法で学生に実践していったかを、課外体育としての「体育会」の誕生、成瀬が考案した日本式バスケットボールを通して紹介する。さらに体育教育に関わった人々を調査、特に初代体育教師の白井規矩郎の足跡を追い、最後に「新しい女」平塚らいてうをシンボルとして、いかに日本女子大学の体育・スポーツが先駆的であり、世に「新しい女」を創出していったかということを示した。

成瀬はアメリカでの女子大学見聞によって、学生が自主的に参加する体育が、身体的なことだけでなくとどまらず全ての社会的行動や精神力の強化に至るまで寄与していることを報告している。麻生もまた「我が校は創立以来、新体育理念であった」として、体育教育を人格形成教育の一つと見ていた点で一致している。成瀬が帰国後に構想した『女子教育』の「體育」において、教育は智徳体の三育に分岐できるが三位一体であるとし、体育は智徳教育の手段であり、目的でもあるとする。新体育理念を実践するために、遊戯性も重視したのである。初代体育教師として白井規矩郎を招き、松浦政泰らと共に成瀬自身が考案した日本式「女子」バスケットボールを推進した。松浦のバスケットボール研究から、ベレンソンが示した勇氣、自制の徳の要請、相助け相救う精神の養成に有用であることを挙げ、さらに運動会を正課体育の成果を公表する場として創立時から実施したこと、自治・自動の精神を涵養するものとして課外活動である体育会をも誕生させたことを紹介する。著者は創立以来受け継がれてきたこれらの教育理念が、まさに日本女子大学の三綱領「自発創生」「信念徹底」「共同奉仕」に一致することを明らかにした。また、平塚らいてうの目を通して「新しい女」が自転車に乗る風景をさらなる自由と解放への具象化と捉えて紹介した。日本女子大学では創立以来一貫して社会で活躍できる女性を教育する手段として体育・スポーツが考えられてきたのである。

日本女子大学における講義、スポーツの授業、そして体育会の指導において、温かい眼差しで学生に接して来られた在りし日の馬場先生のお姿もまた「原風景」と重なるようである。

2014年2月発行 翰林書房 171p. *目白・西生田所蔵 請求記号・377.15-Bab

図書館からのお知らせ

日本女子大学図書館
サービス向上への取り組み
(2014年4月～2015年4月)

<2014年度>

- 学部生の貸出規則改正(冊数5冊→8冊, 期間1ヵ月→21日)(4月)
- 通信教育課程学生の図書館利用登録方法, 認証方法の変更(4月)
- 日本女子大学学術情報リポジトリ本公開(4月) リポジトリ運用指針施行(12月)
- ペットボトルや水筒など蓋が完全に閉まる容器に入った飲み物の閲覧室での摂取可(4月)
- 館内スタンプラリー2014実施(目白, 4月)
- 5階多目的室を利用者に開放(目白, 4月)
- 「学生が読みたい本」実施(5月・10月)
- 大学院生のWebからの文献複写受付開始(5月)
- 玄関ホール貴重書特別展示:ケルムスコット・プレス版「チョーサー作品集」「源氏物語」(目白, 5月・11月)
- Web版利用者アンケート「LibQUAL⁺」結果に対する回答を図書館ホームページに掲載(以後, 更新)(6月)
- 階段・踊り場のカーペット張替(西生田, 8月)
- 国立国会図書館「図書館向けデジタル化資料送信サービス」利用開始(10月)
- 各学科(教員1名)より専門分野の図書館所蔵資料への意見聴取(11月)
- 図書館システム「iLiswave-J V2」バージョンアップ(11月) OPACの操作性向上等
- 4階閲覧室に可動式机・椅子, ホワイトボードを備えた新しい閲覧スペース開設(目白, 3月)

<2015年度>

- 学生対象のJASMINE-Wireless 運用開始: 目白4階閲覧室・グループ研究室, 西生田2階閲覧室(4月)

編集後記 5月に日本文学科と図書館の共催で行われた学術交流企画「大学図書館のVision」は、創立120周年を機にキャンパス再編を予定している本学にとって大変示唆に富む内容であった。このたびは、講演者の先生方と企画に携われた大谷先生より当日の要旨を寄せていただいた。ご参加いただけなかった方々にも、内容の一端に触れていただければ幸いです。一昨年急逝された人間社会学部の馬場先生の遺作にあたる日本女子大学叢書のご紹介を、編集に協力された多摩大学非常勤講師の猪狩真弓氏にご執筆いただくことができた。巻頭写真は西生田図書館のフロアサイン。一目で何階かわかるよう、工夫されている。撮影は鈴木館員。(浜口)

2014年度実施した利用者向け講習会

大学スケジュールとして実施

- ・1年次オリエンテーション<目白・西生田>
スライド上映:4/3 目白・西生田
図書館案内:4/3 西生田(自由参加形式211名参加)

教員からの依頼等により授業時間内に実施

- <目白> 計25回383名
児童1回9名 食物1回10名
被服1回8名 英文19回257名
史学2回95名 物質生物1回4名参加
- <西生田> 計18回313名
現代社会4回70名 社会福祉6回123名
教育1回24名 心理4回48名
文化3回48名

図書館主催で実施

- <目白>
・新大学院生オリエンテーション 4/10
家政学, 文学, 理学 13名参加
- ・資料の探し方講習会-蔵書検索編-
(4月～6月, 10月～11月)
基礎, 基礎+応用の2コース
23回41名参加
- <西生田>
・資料検索講習会(5月～12月)
蔵書検索編, 新聞編, DB日本語(CiNii)編,
DB日本語(JDream III)編, DB英語編,
RefWorks日本語編, 英語編の7コース
11回15名参加

今後も実施しますので、
ふるってご参加ください。